

内田樹×小松秀樹

医療崩壊の文化論

女子大の教授である内田氏にとって身近で気になる話から、今回の対談は幕を開けます。

第4回 なぜ医師不足なのか

内田 医療現場が苦しくなった原因として女性医師が増えたのがあるって、誰か書いてましたけど、それはどういうことですか。

小松 女医さんは辞めるんですよ。地方の公立病院で特に医師が足りなくなっているのは、医局の勢力が衰えてきて、派遣するだけの数の医師がいなくなってことなんですね。

で、女医さんは、医局のアウトサイダーなんです。結婚なんかすると医局と関係なくなるし、出産なんかを機に現場をいったん離れるとフルタイムのキツイところからいなくなりませう。

内田 医局のアウトサイダーですか。

小松 医局っていうのは、割に合わない空疎な地位や、実

質のない学問を重要だっていう幻想の上に成り立っていたと思うんです。実際、大半の臨床系医局で行われてきた基礎的研究は、学問の進歩に貢献していませんから。

たぶん差別されてきたせいもあると思うんですが、女性医師は、そういう幻想ではなく実質を見る傾向が強くて、行動が極めてドライなんです。

内田 樹

うちだ・たつる ●神戸女学院大学教授。1950年東京都生まれ。東京大学文学部卒。東京都立大助手を経て神戸女学院大へ。専門はフランス現代思想、映画論、武道論。著書極めて多数。07年、『私家版・ユダヤ文化論』（文春新書）で小林秀雄賞を受賞。

それと、これも後天的に文化的に植え付けられたものかもしれないんですが、外科系だとものごくキツイ場面の続くことがあるんですけど、そういう時に現場放ったらかして逃げちゃう人がいるんですよ。ことわっておきますが、大半の女性医師は頑張っています。もともと頑張って自殺するよりは逃げる方がいいとは思いますがね。

内田 手術室から逃げちゃうんですか。

小松 手術室から逃げちゃうっていうより、患者さんの世話をすつとして、トラブルがあつたり危ない時で泊まり込みが続くような時、いなくなっちゃう。女医さんでは何人か見ましたね。男も2人逃

げたのを見たことがあるので、女性だからっていうのは違うかもしれない。

ただ、そもそも、今の医療現場の負荷が異常でキツ過ぎるだけだという意見は当然あると思いますし、結婚や育児をサポートするシステムが病院にほとんどないのも事実です。アメリカなんかだとシフト制になっていて、看護師さんと同じで日勤、準夜、深夜と……。

内田 厳しいなあ。

小松 厳しくないですよ。日本の医者は24時間ですから。いつでも呼び出されるんですから。常に自分の居場所を明らかにして、呼び出しが来たら行かないといけないことになってますしね。

シフト制にできるかっていうと、患者側の要求も、昼間診てくれた人がいて主治医だつていう時に、シフトだから今はこの人ですつて言っても、満足するかといったら今の日本人ではちよつと無理ですね。医者も自分勝手な人が多いから、シフト制にしても意思決定がたぶんうまくいかないと思います。

医学部人気と医師の資質

内田 医療現場が大変だとこれだけ言われている一方で、相変わらず医学部受験がものすごく盛んですよね。ある女子の進学校では1学年140人のうち医学

部へ進学したのが40人いるんだそうですよ。

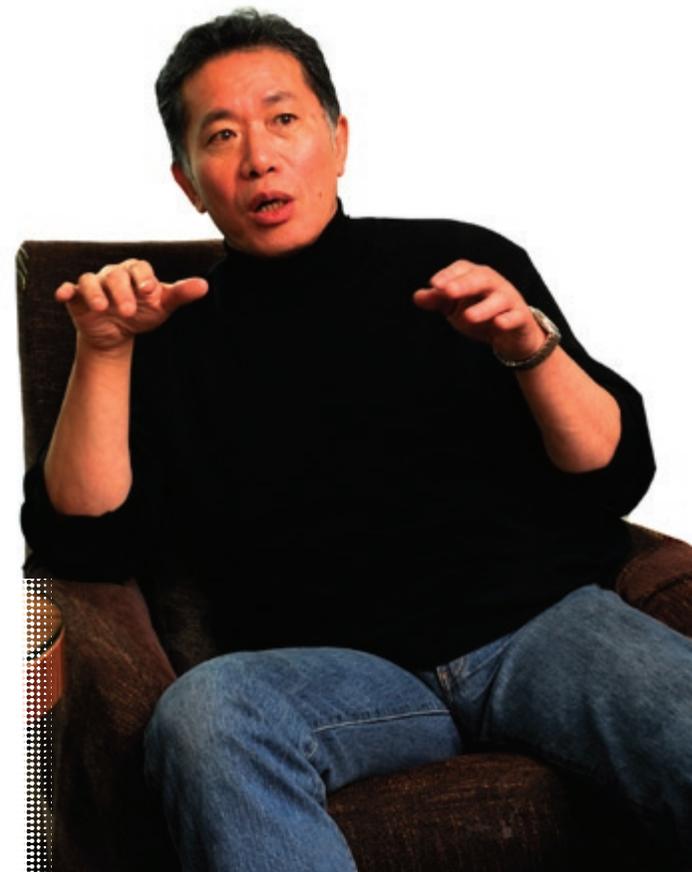
小松 医学部はお嬢様学校の人が行くところじゃないですよ。

内田 ねえ異常ですよねえ。適性でいった時にね、医者に

小松秀樹

こまつ・ひでき ●虎の門病院泌尿器科部長。1949年香川県生まれ。東京大学医学部卒業。同大学病院を含む都内8病院で勤務後、83年に山梨医大助教授、99年から現職。主な著書は『医療崩壊』（朝日新聞社）、『医療の限界』（新潮新書）。

女医の増加が
医局の幻想を暴く。
でも医師不足になる。(小松)



向いている人なんて140人いた時にせいぜい2人とか3人とかでしょ。

小松 医者に向いているか向いてないかというのは……。

内田 使命感ですか。

小松 使命感なんて、どうだ

っていいんですよ。使命感を持つている高校生がいたらアホですよ。

内田 言っておきます。

小松 高校生で医者になる使命感を持つているなんて、訳分からないものを信じ込む能力があるってことじゃないですか。

内田 そうですね。でも40人っておかしいと思いませんか。
小松 それはみんなが、それがいいって言っているからでしょう。

内田 要するに英語と数学ができて偏差値高いと教師も親も塾の先生も医者を勧めるんです。受験エリートがほとんどん医師になつていくことになると、基本的にその人たちは

弱肉強食で優れた人たちが勝ち残って弱者・敗者は脱落していくっていうような価値観を内面化しちゃった人たちだと思っんですよ。やっぱりマズイと思っんですよね。

医者に学力なんか関係ないと思っんですけど。

小松 いやあ、私は関係あると思いますね。やっぱり能力ない人はないですよ。学力ない人が、今のアップトゥーデパートなところでやっっていくのは結構難しいですね。基本的に英語だつて斜め読みできるようになつておかないと第一線は無理ですよ。

医者見てて思うのに、高校生ぐらいの時に使命感を持つてやっっている人よりは、普通に勉強できただけで何となくなつちやつたつていう人の方がいいんですよ。

内田 (落語の)『あくび指南』と一緒にですね。「お連れさんの方がお上手です」つていう、あれ。自発的にやつたわけじ

けに手厚く貧乏人に対してはチャンスが少ないことによつて、このような職業に就いているつていう人たちが構造的に初等教育の担い手だつたわけです。

これつてね、一つの装置としてはよくできていると思うんですよ。子供たちに何を教えるかつていうと、世の中はフェアじゃないぞつて、君たち現実はよろしくないで頑張つて理想的な社会をつくつてくれというメッセージを出さざるを得ない。

受験エリートみたいな勝ち残つた人々が初等教育の担い手となつた場合には、一所懸命努力して、その努力の成果として今教壇に立っている

名誉とやせ我慢はセット。報酬は関係ないという医師も多い。(小松)

偏差値高いと医師に。受験エリートの弊害 大きいのではないか。(内田)

やなくて、ものの弾みでやつた仕事つて意外とパフォーマンス高いんですよ。

ただ、受験エリートの弊害はあるんじゃないかと思っんです。というのが、教育界でも似たようなことがあつて、教師になるのが難しくなつた時代が長いんですよ。そうすると、『でもしか教師』の時代は比較的教育がうまくいつていたのに、教師になるのが非常に難しい時代になつて、その人たちが教壇に立つてみたところで、非常に教育力の低い人たちであつたことが分かつてきてしまつた、と。

小松 それ、本当にそれ以外の因果関係はありませんか。
内田 もちろん色々あります

利益の追求つていうのを非常に優先するマインドの人たちが、医療の現場や教育の現場に増えてしまつと、うまくないですよ。

小松 日本の教育現場で自己利益の追求なんて、ほとんどできるような格好になつてないですよ。カリスマみたいな教師が受験英語の教科書を書くとかなら割と儲かるかもしれないけれど、普通にやつても何もありませんよ。

内田 そうです。教師には努力と報酬の関係つてないんですよ。だから努力と報酬の関係ですつと頑張つてきた人間はモチベーションがなくなつちやうんです。努力しても何も報われないつてね。

受験勉強つて努力と報酬、基本的に相関しますでしょ。でもそれ以外の仕事、医者もたぶんそうだと思いますが、現場の仕事つて努力と報酬は相関しないから、その状態で労働のモチベーションを持続

するのが難しいんですよ。合理的に動いていた人はね。

小松 日本のエリートつて、努力と報酬が一切関係ないのがすつと培われてきていて、ちゃんとした職業では、貢献度が報酬に結びつかないのが特徴だと思っんです。江戸時代を通じて、権力、財力、名誉が一つのところに集中しない仕組みをつくつてきたと言われていますよ。

内田 本来はそうだと思っんですよ。でも、市場主義ではそうはいかない。

小松 医者の場合、結構いるんですよ。大きいキツイところで働いている人つて、報酬をあまり求めてないですよ。それじゃなかったら、とつきの昔に崩壊してらんで。一般に一定年齢以上の医師の給料の金額は、医師としての地位と逆になります。日本では、名誉には「やせ我慢」を伴つていうのが普通だつたんじゃないですか。